

# 黒埼町の今昔

町史編さん課

明治十二年の柳作大洪水(一)  
じいさんは屋根に乗って鳥原まで、  
ばあさんは流れ流れて亀貝まで漂流

## 柳作の水戸場の地蔵様

町道柳作線の新幹線交差点から、同町道を八十ほどと上手に歩くと小さな地蔵堂がある。中に祀られている二体の地蔵のうち、大きな方を柳作の人たちは「水戸場の地蔵様」と呼んでいる。(注、水戸場：堤防が破れた箇所)



柳作水戸場の地蔵様

村民(当時は柳作村)が祀ったのがこの地蔵である。(注、口碑：昔から地域の人々の間で語り伝えられた話)  
明治十二年の柳作大破壊  
明治十二年、新潟新聞は七月の降雨をこう伝えている。「初め三日までは蒸し暑い日が続く、四日から降り出した

雨は次第に激しさを加え、十日に至ってもまだ降り止まず、各河川は上流から押し下る水のため既に危険水位に達した。  
当時、廢川間近かつた旧信濃川も、上流からの水と降り続く雨により、いつもの流れから様相を一変し、濁流は柳作と西山田間の河川敷内で渦を巻いていた。

死で防ごうとしたが、次第に穴は広がり、ものすごい勢いで水が流れ込んだ。そして、百八十坪余の大破壊となった。半鐘がジャン、ジャン、ジャンと鳴り響き「土手が切れたぞう」と悲痛な叫び声が上がった。村中大騒ぎになった。切れた場所に駆けつける者、家族の安否を尋ねる者、逃げまどう者。濁流はみるみる村に押し寄せた。

それは今までに見たことのない大水だった。たちまち、全戸の人たちが集まり、堤防を捕強した。川下の立仏や鳥原

佐五平ろんの老夫婦 決壊した堤防のすぐ前に六軒の家が並んでいた。上から屋号でいえば、池田祐助ろん、池田佐五平ろん、風間六蔵ろん、籠島市内ろん、小林半五郎ろん、風間嘉次右エ門どんである。

からも応援がきた。だが、人々の懸命の努力も自然の猛威の前にははかなく、つい七月十二日破壊した。古老の言い伝えによればその模様はこうである。  
初め前記の地蔵の付近の堤防に小さな穴があった。人々は「土俵を」「くい」と必

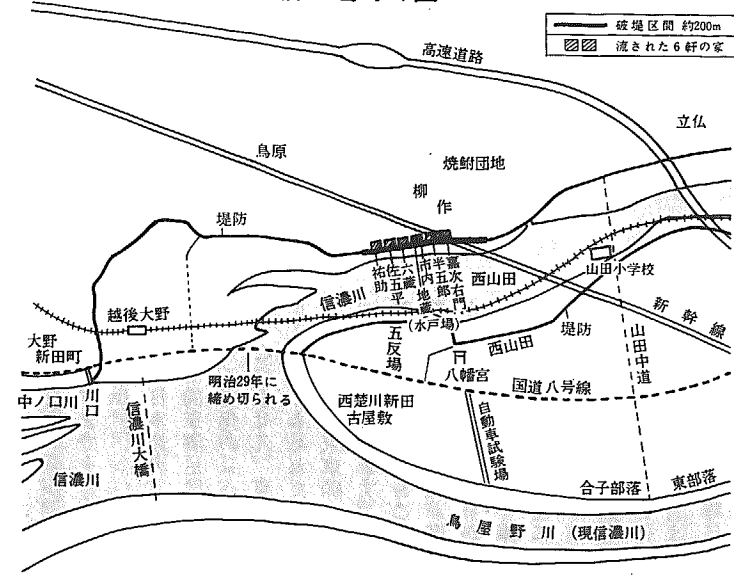
濁流は一丈(三二センチ)、二寸と水位を上げ、恐れを抱いた佐五平を除く五軒の人たちは近くの土手などに避難したが、七十余歳になる佐五平ろんの老夫婦はまだ家にいた。二人ともまさか家が流されるなどと思っていなかった。じいさん(名前不詳)は蔵に

行っていた。ばあさん(名前不詳)は家の中で刻々と増える水を眺めていた。  
じいさん二キロ先の鳥原へ 蔵の二階にいたじいさんが階段を降りようとして驚いた。水は階段の半ばぐらゐまで達していた。下からは出れないと思いい、屋根を破って出ることになった。屋根はわらぶきで破るのは大変だった。ようやく屋根に穴をあけ、屋上に立つてまた驚いた。濁流は家の軒まで達し、蔵の屋根も水に浸り始めようとしていた。

それから間もなく、水勢にもまれた蔵はばりばりと大きな音をたて、柱や下部を残したまま、屋根の部分だけが水に流れ始めた。必死にしがみついているじいさんの目に、同じように濁流の中を浮き沈みしながら流れて行く小屋や樹木が見えた。樹木や家具の上にはとぐる巻く何十匹もの蛇がいた。  
じいさんは子供のころ親たちから聞かされたことを思い出してぞっとした。「洪水になると住みかを無くした蛇が何

十匹も固まりになり、流れる小屋や木に泳ぎつき、命からがらそれらにすがりついている人にもからみつく。その恐ろしさで命を失う人が多い。心細くなったじいさんの脳裏にばあさんのことが浮かんだがどうすることもできなかった。しばらくしてじいさんを乗せた屋根は、二、三ほど流れて鳥原の笠原重五郎ろんの上手の大きな木の幹にかかって止まった。

明治12年柳作破堤当時の図



ばあさん板戸に乗って亀貝へ 一方、ばあさんの身も大変だった。水が家に入り屋根の近くまで達すると、家が浮き上がってしまった。そのとき、ばあさんは家と一緒に流される覚悟を決めた。水で座敷の大きな板戸がはずれた。これが幸運だった。ばあさんは板戸にしがみついた。家は流れ始めやがて十数キロも離れた亀貝村(現新潟市)のけやきの幹に漂着した。  
この漂流記は今も柳作に語り伝えられているが、破壊で流された六軒のうちの半五郎ろんの孫にあたる、故小林弘さんがこう詠んでいる。「川切れて逃げるいと間なく戸に乗りて坂井輪(亀貝)までも流されたりと」。  
(取材協力・風間誠三郎さん(柳作)、風間徳蔵さん(柳作)。参考資料・新潟新聞)



# この

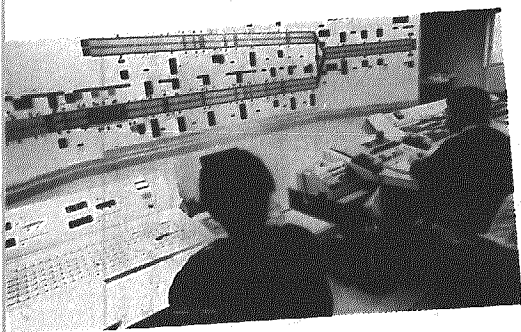
# の道を

# 生かすみち

特集

(写真上) 北陸自動車道の起点・新潟黒埼インターチェンジ。昭和五十三年九月二十一日、ここから長岡まで五十四・五キロが開通し黒埼町は高速交通時代を迎えました。北陸道の左側を走るのは三年前に開通した上越新幹線。将来、インターと料金所間に西バイパス、外環状線が入ってきて、この写真は大きく変わります

シルクロードの例を見るように、古くから人は「道」を造り栄えてきました。「道」があるところに人が住み、町が出来、文化が生まれてきました。それは今も続いています。七年前、高速交通時代の幕が開きました。町に北陸自動車道とその起点・新潟黒埼インターチェンジが刻みこまれたのです。第二幕が今秋始まりました。わたしたちの町は東京と三時間半の距離で結ばれました。関越自動車道が全線開通したのです。また、次から次へと幕は開きます。現在、小針街路が建設中です。西バイパスは用地買収に着手されます。外環状線のルートが決定し発表されました。わたしたちは「道」をどう生かしていけばよいでしょうか。観客のように黙って見ているべきでしょうか。それとも、「道」をわたしたちのために演出すべきでしょうか。今、舞台はわたしたちを待っているのです。



本町山田にある日本道路公団新潟管制室。高速道のあらゆる情報がここに集まっています。10月の関越道全通にともない、正面のパネルが2メートル延長されました